

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 15 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤（C）

研究期間：平成 21～24

課題番号：21520032

研究課題名（和文） 「メディアとしての身体」の哲学的研究

研究課題名（英文） Philosophical Investigation of the Body as Medium

研究代表者

大黒 岳彦（DAIKOKU TAKEHIKO）

明治大学・情報コミュニケーション学部・教授

研究者番号：30369441

研究成果の概要（和文）：本研究では、デカルトの「心身二元論」の枠組みにおいては傍流の扱いを受けてきたメルロ＝ポンティらの「行動」的身体研究、クラーゲスらの「情動」的身体研究など、非デカルト的身体論を体系的に掘り起こし、それらを「身体メディア」の概念の下で統一的に整理・解明した。また、その作業によって「身体」論を社会次元に開き、哲学が社会学やメディア論との連携・協働を図りながら、高度情報社会の存立構造を分析するための拠点を築いた。

研究成果の概要（英文）：In this study, Non-cartesian body theories, for examples, a behavioral approach of Merleau-Ponty and an emotional approach of Klages, that are regarded as heretical branches of the body theory in the frame of Cartesian "Mind-body dualism," are systematically dug up, and they were arranged and clarified unitedly under the concept of "Bodily media." In addition, I got a base to analyze existence structure of the advanced information society while I opened the "body" idea in a social dimension by the philosophical collaboration with sociology and the media theory.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学

キーワード：メディア、身体、行動、情動

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初、「身体」の哲学的研究については、心身問題の枠組みに捕らわれない

研究が叢生していた。例えば知覚心理学の分野ではギブソンによる「アフォーダンス」の観点からの身体研究（Gibson, J. J. The

Ecological Approach to Visual Perception, 1979) が注目されていたし、M. ハイデッガーの「世界-内-存在」の概念を認知科学に持ち込んで身体の重要性を強調したドレイファスの議論 (Dreyfus, Hubert L. Being-in-the-world: A Commentary on Heidegger's Being and Time, 1991) も見逃せなかった。また M. シューラーや L. クラークスを踏まえて独自の身体論を展開する H. シュミッツの研究 (Schmitz, Hermann. System der Philosophie, Bd. II:1. Teil: Der Leib, 1965) が現象学派における身体論の新たな展開を期待させた。但し、いずれも「社会」と「身体」との関係の解明に関しては十分とはいえなかった。こうした状況を背景としつつ、本研究は「メディア」概念を「身体」研究に導入することで先行諸研究の欠を埋めることを目指して企図された。

一方、「メディア」概念の哲学的研究については、社会哲学者である T. パーソンスの研究 (Parsons, T. The Social System, 1951)、J. ハーバマスの研究 (Habermas, Jürgen, Theorie des kommunikativen Handelns, 1981) がすでに有名であったが、いずれも「言語」をモデルにして「メディア」を把握しており、したがって、こうした理論的構図では「身体」というメディアを原理的に主題化できないと思われた。それに対して同じく社会哲学者の N. ルーマンはその著『社会の社会』 (Luhmann, Niklas, Die Gesellschaft der Gesellschaft, 1997) において「メディア/形式」という創発モデルを採用した新しいメディア概念を提出した。本研究はこのルーマンの「メディア」概念を「身体」に適用しようと試みた。

日本においては、早くから M. ポンティの身体論を踏まえた市川浩の「身分け」論という非デカルト的系譜の優れた身体論が存在した (『精神としての身体』1975)。また、佐々木正人 (『包まれるヒト—〈環境〉の存在論』2007) や河野哲也 (『「心」はからだの外にある—「エコロジカルな私」の哲学』2006) が J. J. ギブソンのアフォーダンス理論を発展させる形で新たな身体論を展開してもいた。だが「身体」を社会構成の「メディア」として把握する試みは未だ存在しなかった。

(2) 本研究は、研究代表者が独立に進めてきた「身体論」研究と「メディア論」研究という二つの研究が交差する地点で着想されている。

研究代表者は、「身体」の研究に際して、それを「心」の対立項としてではなく、「社会」の構成要素として捉えようと努めてきた。その過程で研究代表者は「行動」における世界の分節化とともに「情動」的共鳴によっても世界が身体的に体制化されること、そして

「行動」と「情動」という二つの契機を総合するものとして「身体」を捉える必要性を痛感するに至った。

また研究代表者は、ルーマンの社会システム論を「メディア」概念を軸として再構成する作業に取り組んできたが、その過程でルーマンの「メディア」概念が社会構成メカニズムの理論的定式化に際して、中枢的な役割を果たしていることを発見すると同時に、ルーマンの社会システム論では社会構成に果たす「身体」の役割がほとんど顧慮されていないことにも気付くに至った。

ルーマンの「メディア」理論に、そこからは欠落している「身体」についての哲学的考察を組み込むことで、社会構成の重層的な様相を解明できるのではないかと考えるに至った。

(3) 「身体論」の研究においては、「心身問題」という理論枠からはみ出す身体論の二つの系譜を論文「非デカルト的身体論の諸相」 (『明治大学社会科学研究所紀要』第43巻第2号, 2005—研究業績の8.) において簡単に辿った。この論文で、非デカルト的な身体論の枠組みにおいて、「行動」と「情動」という二つのテーマが存在することを確認した。

「メディア論」の研究においては、『〈メディア〉の哲学』 (NTT出版, 2006—研究業績5.) において、ルーマンの社会システム論に占める「メディア」概念の重要な役割と、またその適用の不十分性を論じた。また、「身体」を社会構成の「メディア」として捉える論文二編「身体メディア論・序説」 (『思想』No. 970, 2005—研究業績9.) 「身体メディア論へのプロレゴメナ」 (『社会情報学研究』vol. 9, No. 1, 2005—研究業績7.) を既に発表済みであるが、いずれも試論の域を出ないものであったため、本格的な取り組みを本研究によって進めようと考えた。

2. 研究の目的

高度情報化の実現へと向かう現代社会においては、インターネットを介した匿名的コミュニケーションの普及、またヴァーチャル・リアリティー技術の長足の進歩によって、「身体」の希薄化と仮想化が社会的規模で進行している。だが、このような現実と直面しながら「身体」が社会的現実とどう関わっており、また関わるべきなのか、を考察する理論的視座は十分に整っていない。

本研究は情報化の進展がもたらしたこうした課題に取り組むために、まず、従来「身体」を論じる際のデカルト以来の哲学的参照枠、すなわち身体を精神と対立させた上で「身体は精神といかんして関わるのか」という問いを立てる、いわゆる心身問題の枠組みから離れ、身体を本質的に社会的な存在と捉えた上

で「社会にとって身体とは何か？」という問題を設定した。

次に、「精神 vs 身体」という構図では掬い取れない「身体」の特性や独自性を考察し、また「身体」と「社会」との関係に焦点を当てた諸理論を思想史の中で体系的に洗い出すことを通じて、そうした身体観を、社会を構成する「メディアとしての身体」として整理し、定式化することを第一の目標に据えた。そのうえで、この「メディアとしての身体」が社会において、いかなる機能を果たしており、また社会の高度情報化の中で「身体」がどのような変容を遂げつつあるのか、その解明へと歩を進めるとする第二の目的を果たそうとした。

3. 研究の方法

(1) 研究期間中に達成を目指した課題は以下の四項目にまとめることができる。

I. 哲学的身体論の思想史的研究によって、デカルト以来の「心身問題」の構図からはみ出す身体についての諸理論を整理し、二つの系譜にまとめること。

II. ルーマンの「メディア」概念を、「身体」を軸として再構成すること。

III. I. II. の作業を踏まえつつ、「身体メディア」と「社会」との関連を定式化すること。

IV. 高度情報社会という環境において、従来の「身体—社会」の関係が、いかなる変容を遂げつつあるのかを、III. の成果に基づいて分析すること。

I. は思想史的研究、II. は文献実証的研究、III. は理論的研究、がそれぞれ中心となる。IV. は理論的研究が中心となるが、哲学だけでなく、情報社会論的なアプローチも採用する。

(2) 具体的には、まず、「心身問題」の枠内での身体論を対比項としながら、非デカルト的な身体論の特性を、「行動的身体」と「情動的身体」という二つの系譜を代表的な文献にあたるなかで思想史的に辿り直し跡付け、明らかにする作業に取り組んだ。「行動的身体」論の系譜では特にメルロ＝ポンティの遺稿 (Merleau-PontyR, Maurice, *Le visible et l'invisible, suivi de notes de travail*, Gallimard, 1964) を中心に、また「情動的身体」論の系譜では特にクラークス (Klages, Ludwig, *Der Geist als Widersacher der Seele*, Sämtliche Werke Bd. 1., Bouvier, 2000) を軸に解説を行った。

次に Carl-Auer Verlag、ルーマンの社会システム論における「メディア」概念の含意を「身体」の概念を軸に、再度ルーマンのテキストに即しながら実証的に掘り起こす作業に取り組んだ。本研究ではこうした草稿群からルーマンの身体観を再構成した。

そのうえで「メディアとしての身体」が社会構成にどのように関与しているのかを分析した。具体的な作業としては、「身体」を社会構成の「メディア」とみなす社会哲学的な諸理論のサーベイと解説を行い、またインターネットやヴァーチャル・リアリティーといった情報技術・メディア技術がどのように身体のある方を変容させ、社会のある方を再編していくのかについて、現場取材やインタビューを実施し、考察の材料とした。

4. 研究成果

(1) 哲学で伝統的に「心身問題」という枠組みの中で問題とされてきた「身体」を、「心との関係」ではなく「社会との関係」を主軸に考察したことで、身体の世界構成機能の大枠を説明することができた。社会学の分野ではすでに M. フーコーの『監獄の誕生』『性の歴史』、P. ブルデュエの『実践感覚』などの著作によって「身体」と「社会」との本質的な関係が論じられている。しかし、哲学においては身体論の主流はいまだに個体レベルでの議論にとどまっており、「身体-社会」関係の哲学的研究は、高度情報社会の進展によって喫緊の課題となっているにもかかわらずいまだ部分的にしか着手されていなかった。

(2) 従来、常識的には「情報を運ぶ乗り物」としてイメージされ、哲学においては離在する諸項の「媒体」「媒介」として理解されてきた「メディア」概念を N. ルーマンの独自の「メディア」解釈——美学でいう、芸術的モチーフを表現するための絵の具や石膏といったマチエールとしての「メディウム」概念に依拠しつつ“形式”を構成するための“素材”と解する——を採用し、更にルーマンの枠組みを超えて「メディア」概念を「身体」へと拡張することで、「身体」と「社会」との関係の解明するための新たな視座を設定できたと考える。

(3) 本研究は、デカルトの「心身二元論」の枠組みにおいては傍流の扱いを受けてきた非デカルト的な身体論を体系的に掘り起こし再評価する思想史的研究を作業の一環として組み込んでいる。従来、メルロ＝ポンティらの「行動」的身体研究、クラークスらの「情動」的身体研究において独立に主題化されてきた身体への非デカルト的なアプローチを「身体メディア」の概念の下で統一的に整理・解明できた。また、その作業によって「身体」論が社会次元に開かれ、哲学が社会学やメディア論との連携・協働を図りながら、高度情報社会の存立構造を分析するための拠点を獲得することができたと考える。

(4) ルーマンの「社会システム論」研究にも哲学的見地から一定の貢献ができたと考ええる。ルーマンの社会システム論の鍵概念の一つが「メディア」に存することは、ドイツにおけるルーマン研究においても徐々に共通の認識となりつつある。しかし、そうした研究の多くは「マスメディア」論という閉じられた領域へと向かっており、ルーマン「メディア」概念の哲学的な含意の究明は遅滞が生じていた。本研究は、ルーマンの「メディア」概念が「身体」へも適用可能な、一つの方法論的な「操作概念」であることを明らかにすることで、「社会システム論」の新たな可能性を示せたものと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

「映像の社会哲学的研究—フィクション映画とドキュメンタリーの分析を中心に—」、大黒岳彦、2012、『明治大学社会科学研究所紀要』51(1)、査読有、明治大学社会科学研究所 263～275 頁

〔図書〕(計1件)

『コミュニケーション理論の再構築：身体・メディア・情報空間』、大黒岳彦・山内志朗・伊藤守・柴田邦臣・遠藤薫・正村俊之、2012、勁草書房、東京、29～68 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大黒 岳彦 (DAIKOKU TAKEHIKO)

明治大学・情報コミュニケーション学部・教授

研究者番号：30369441